

作家の肖像

第 12 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1929-2009
粟津 潔

あわづ・きよし
1929年東京都生まれ。17歳から
独学で絵を描き始める。55年「海
を返せ」のポスターで第5回日本
宣伝美術会賞を受賞し注目を浴
びる。60年建築家たちと「メタボ
リズム」を結成。69年映画「心中
天網島」の美術で伊藤喜朔賞。
90年紫綬褒章受章。主な著書に
「ガウディ讃歌」など。日本を代
表するグラフィックデザイナー
として幅広く活躍。80歳で死去。

好奇心の塊

1978年に出版された『粟津潔 作品集』。全部で3巻あり、粟津さんのさまざまな仕事を紹介されています。発行当時、私はある雑誌にこの本の書評を書くことになりました。それまで、絵画や彫刻についての文章を書いたことは何度もありましたが、デザインについては経験がありません。ですから、この本を通して、グラフィックデザインやグラフィックデザイナーの仕事というものを、一から考えることになりました。だから、粟津さんは、私にとってグラフィックデザインという世界を知る「入口」となった存在です。

その後、ご本人と何度かお会いする機会がありましたが、気取ったところがなく、歳の離れた私にも、気さくに接してくれたのが印象に残っています。好奇心が旺盛で、急に「酒井君、今、君は何に興味があるの？僕は、^{こうげんがく}考現学^{こんわじろう}の今和次郎^(※1)に興味があつてさ……」などと話しかけてくることもありました。

粟津さんは、たいへん好奇心が強く、そして、たいへんな勉強家でした。デザインだけでなく、民俗学、生物学など、その興味の範囲は多岐にわたります。彼が、映画、舞台芸術、建築……と、活躍の場を広げていったのは、自然な流れだったのかもしれません。

身体的な線

粟津さんは、10代の頃から絵を描き始めたそうです。山手線を何周もして、乗客をひたすらスケッチしてデッサン力をつけるなど、独自の方法で絵を学びました。その後、映画

会社の宣伝部に入り、デザイナーとして頭角を現します。

彼が描く線を見ていると、「梅の枝のようだな」と思います。まっすぐでなく、うねるように伸びる、身体的な感触を覚える線です。ベン・シャーン^(※2)がとても好きだったようですが、線にもその影響を感じます。

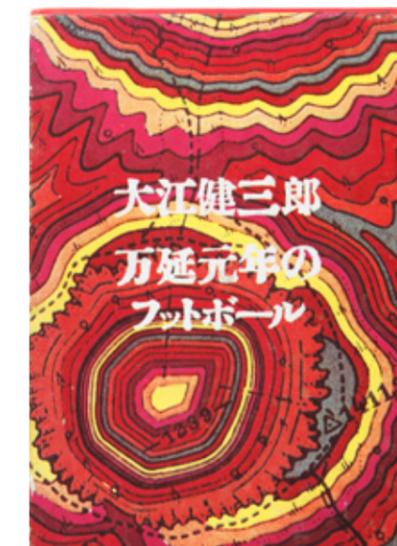
「情念」の世界

粟津さんの作品は、どれもすばらしいのですが、私は、雑誌『季刊藝術』の表紙が特に好きです。雑誌そのものも魅力的な内容で、毎号、その内容と呼応するような、斬新なデザインが目を引きました。大江健三郎の『万延元年のフットボール』の装丁もいいですね。このデザインは、地図がモチーフとなっていますが、粟津さんの作品には、地図、印鑑、指紋などがたびたび使われます。それらが、得もいわれぬ世界観を生み出していると思います。

彼の作品を見ていると、いつも「情念」という言葉が浮かびます。しかし、本能に任せて爆発するような情念ではなく、ぎりぎりのところで発露してしまうような情念です。しかし、ご本人からは、そういうドロドロした部分はいっさい感じない。不思議な魅力をもった方です。(談)

※1 今和次郎(1888-1973年)
民俗学研究者。「考古学」に対し、現代の人々の生活を採集し分析した「考現学」で知られる。
※2 ベン・シャーン(1898-1969年)
リトアニアで生まれ、アメリカで活躍した画家。多くのデザイナーに影響を与えた。

酒井 忠康
さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校「美術」代表著者。



左上/「オ2回世界宗教者平和会議／東京文化会館／世界宗教者平和会議国際継続委員会」

シルクスクリーン
102.5×73.0cm 1964年
粟津は、印鑑や指紋などの日常に潜むグラフィック的要素を取り出して、デザインに多用した。

左下/「季刊藝術」4巻4号 通巻15号:1970年秋」
1970年 季刊藝術出版
雑誌『季刊藝術』の表紙・目次・扉のデザインを3年間担当。斬新なデザインが話題を呼んだ。

下中/大江健三郎『万延元年のフットボール』
1967年 講談社
粟津が装丁を担当。このような地図をモチーフとした作品も多く残した。

右下/「砂の女／la femme du sable／teshigahara production」
シルクスクリーン・紙
158.0×97.0cm 1964年
映画「砂の女」は、安部公房自身が脚本を務め、監督は勅使河原宏、音楽は武満徹。粟津はポスターとタイトルデザインを担当した。

撮影:木奥恵三
画像提供:金沢21世紀美術館
作品は、すべて金沢21世紀美術館蔵

